ゾンビ

皇　欠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ゾンビ

【Ｎコード】
Ｎ９０５７Ｖ

【作者名】
皇　欠

【あらすじ】
ジャングルに隔離された人間の様で人間じゅない種族　屍（ゾンビ）この物語は彼らの顛末を書いたお話である。

※これは自分達のサイトＳＮＳＦからの転載です。

第一話（前書き）

これはギャグではありません！！
ホラーです！！
誰が何と言おうとギャグではありません！

第一話

そこはとある世界にある、とある国にある、とあるジャングルにある、とある施設。
そこには人間でありながら人間でない者たちが生活していた。いや人間だったというほうが正しいのかもしれない。

その者達は屍（ゾンビ）と呼ばれてガリ……プギャー！ｍ９（；Д；）プギャー！　舌！　舌噛んだ！　イタッ！　イッタ！

あーやっぱ俺には無理だわ。丁寧語なんて似合わん。よし！　口調を戻していこう。
そいつらは屍（ゾンビ）と呼ばれていてだな。姿、形は確かに人間そのものだがそいつらが明らかに人間と違うのは体が取れやすいっということだ。少しの衝撃を加えられても手がポロリ、足がゴロリ時には頭が外れてしまうことだってある。プラモじゃねえぞ。

だがそんなことこいつらにとっては些細なこと。大丈夫だ問題ないこいつらには尋常ではない超再生力があるからだ。この能力はそこらへんの単細胞生物も真っ青の再生力は例え手が？げようが、足が？げようが首が飛ぼうが、体がミンチになろうが、瞬きする一瞬のうちに見た目全く変わらない姿に再生するのだ。そしてこれはそんな人間のような人間じゃない種族の悲しいお話。はじまりはじまり。
（●´艸`●）
そのジャングルの施設には約１０００人の屍（ゾンビ）が集められて……いや……軟禁させられているといったほうが正しいな。
しかしそんな屍（ゾンビ）の施設にも普通の人間の姿もある。そいつは屍（ゾンビ）１００人を監視するために送られた一般人である。

いや、こいつを普通の人間と定義すると今の人間は全て腐っていることになる。名前は山田哲郎（神の視点命名）現在４０歳、独身、職業監視員という名の自宅警備員、もちろん童貞。まぁここは人生のダメ人間の廃棄場も兼ねているからそんな奴しかいないのはしょうがない。

その山田がここに勤めて？　すでに２０年の月日が流れているがやった仕事といえばガンプラ作りオンリーだ。しかも終始その手からガンプラを手放さないというガンプラマニアだ。今は最大のガンプラであるデンドロビウム（３つ目）を鋭意製作中だ。だがこの山田自分の仕事はきちんとこなす珍しいダメ人間なのだ。仕事をしてるんならダメではないのではないかだって？　違う違う。ダメな人間は例え仕事していてもダメなんだ。

それにこいつが仕事をこなしている理由が仕事しないとガンプラが貰えないというどうしようもなくダメな理由だからだ。まぁこいつにとっては死活問題だろうが……（´Д`）＝３

いつものように山田が食堂で屍（ゾンビ）と離れた席で一人黙々とガンプラ雑誌を読みながら食べていて（メニューはクロワッサンにサラダ、目玉焼き。普通にうまそう）目玉焼きに醤油をかけて食べようとした瞬間男の屍（ゾンビ）がその手を掴み、話しもといいちゃもんをつけてきた。

「おいおい。山田さんよ目玉焼きにはソースだろ。なぁみんな？」

食堂にいた男女全ての屍（ゾンビ）が首を縦に振った。その何人かが強く振り過ぎてポロリと落としたが問題ない。どうやら屍（ゾンビ）の好みは似通ってるらしい。山田は屍（ゾンビ）の手をうざったそうに払いのけ、雑誌を読む作業に戻りながら、

「お前ら悲しい奴らだよな。生まれたときからこんなとこにいるせいで味覚がおかしくなっちまったようだな」

苛立たせる声で笑いやがった。神であるはずの俺でさえもその笑い方を見た瞬間あーこいつ殴りてーと思ってしまった。右ストレートッッ！！（●。Д。）┣●）、Д。）・∵・゛がぁッ！

その気持ちは屍（ゾンビ）も同じだったらしく、

――ただ俺様と違ったのは本当に実力行使をしたことだが、

ベキッという音と、バキッという音が同時に聞こえ、数瞬後ドカンという音がした。

最初の音はもちろん屍（ゾンビ）が山田と殴り飛ばした音だ。そして次の音は殴った屍（ゾンビ）の腕が半ばからぽっきりと折れ、千切れてしまった。最後の音はぶっ飛んだ山田が壁に激突した音だ。

山田が激突した傍に屍（ゾンビ）の腕がポトリと落ちる。殴った屍（ゾンビ）はすでに腕の再生を終えていて止めと言わんばかりに再度山田の腹を殴りつける。

そして殴った屍（ゾンビ）が声高らかに宣言する。

「みんな～脱獄のときは来た！　今ここでこいつを黙らしておけば俺たちの自由は約束されたも当然だ！」

その言葉屍（ゾンビ）達はおおーと声を張り上げ、拳を天に突きだす。

「最初の仕事はこの役立たずをボコボコにするぞ！」

もう一度おおーと声を張り上げ、山田を殴り、蹴り、そのたびに腕が飛び、足が飛び、時には笑顔を湛えたままの顔が飛び（きもいよ）、そして事が済んだあとにはそこには文字通り屍（ゾンビ）の山が出来上がっていた。その姿を満足したように何度も頷きながら屍（ゾンビ）達は外に出て

いく。
腕と足、時々顔という屍の山に埋まった山田は日が暮れ出したころようやくそこから這い出し、体中に体のパーツをくっつけたままガンプラを組み立て始めた。顔はボコボコに腫れ、目はマトモに開けることすらできず、体も至る所に紫に変色し、内出血をしている。そんな状態になってもガンプラを作る手をやめない。恐るべし山田のガンプラ魂！

第二話

さて施設を脱走した屍達(ゾンビ)はどこに行ったかというと……迷っていた。

「おい、ここどこだよ？」

「そういえば施設でたらずっとジャングルだって事忘れてた」

脱走を促したリーダー格の男が頭を掻きながらそう宣った。頭を掻きながら指が次々と落ちているのは秘密だ！！

「まぁいいじゃないか。気楽に行こうぜ。どの道俺達は喰わなくても死ねねぇんだから歩き続ければいつか出られるだろ」

と楽観的な結論に行きあたった。

いいなぁ～死ねない体ぁ。俺も死ねないけど……。

そして千人もの屍達(ゾンビ)の大行進は昼夜を問わず三日も歩き続けた。鬱蒼と生い茂るジャングルの木々を自らの拳を砕きながら（文字通り砕きながら）直進してそして三日後の夜ジャングルに寄り添うようにその村はあった。

簡素な家々が建ち並んでおり、電気もちゃんと通っているのか窓から光が漏れている。

「よしここで食べ物をもらおう」

リーダーがそう言って一つの家のドアをノックした。力加減が絶妙だったのか今回は手が外れる事もなかった。

ドアの向こうから「はぁーい」と声がしてドアが開いた。

だがドアは予想よりも勢い良く開かれゾンビは躱す事が出来ずドア

に当たってしまった。

「あっごめんなさい大丈夫？」

出てきたのは四十歳ぐらいの恰幅良い女性が口に手を当てながら謝る。

「あっいえいえ大丈夫ですよ」

手を振りながら返す屍（ゾンビ）だがそこでポロリと首が落ちた。

…………沈黙が降りた。ジャングルの中から葉が擦れる音と虫の鳴き声だけが聞こえてくるがここだけはそんなのからは隔離されている。

良い夜だな〜……

やがて女性はふるふると震えながらもうすでに再生の終わった男の顔を指差し口を徐々に開け、三、二、一、

「きゃ〜〜〜〜〜〜!!!!!!!!!!!!!!」

と大声で（いやもちろん）悲鳴を上げた声に驚いた屍（ゾンビ）達は辺りをワタワタと動き回り、奥から銃を持った男が出てきた。

「どうした?!」

「あ……あ……」

恐怖で声が出なくなったらしい。又は悲鳴を上げて喉が枯れたのか
まぁどちらでも構わないが……。
とりあえず男は銃は構えて狼狽えている屍達（ゾンビ）に向かって、

「お前達！！　俺の妻に何をした！！」

屍達（ゾンビ）は一瞬動きを止めてすぐに否定するために手と顔を横にぶんぶんと振る。
だが、このバカ達は学習能力がないのか勢い良く振り過ぎたために手と顔が?げてしまった。
しかも全員が……。
その光景を直に見ていたらベジタリアンに目覚める事間違いなし！

「この化物！！」
ドンッ　（（???益??））??┣┫?一）゜Д）；。、・．
猟銃が火を吹き、屍（ゾンビ）の一体の胸を撃ち抜いた。
人間だったら確実に即死しているだろう一発を受けた屍（ゾンビ）だがそこで平然と受け止め、傷の回りの肉が集まって、その傷を埋めていき、最終的には再生した。
男は茫然とするがすぐに立ち直り、

「うわ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜！！！！！！！！！！！」

悲鳴を上げながら銃を乱発する。
ドンッ！　ドンッ！　　（（???益??））??┣┫?一）。
Д）；。、・．
と連続して響く。

銃を撃ち尽くした頃、屍達(ゾンビ)の体は上半身の全てが吹き飛び、残った下半身からは噴水の如く血が噴き出す。
男の顔に幾つかの雫が付く。そして血の噴水が収まった時そこには完全に再生した屍(ゾンビ)の上半身があった。
今度こそ完璧に完膚なきまでに男の精神は壊れ、現実から逃れるように気絶した。
屍(ゾンビ)は自分が原因とは露知らず倒れた男を揺さぶった。

「大丈夫ですか？」
「う～ん……ハッ！」

と男は一度眼を覚ます……が！
屍(ゾンビ)を見てまた気絶した。
その反応でまた屍(ゾンビ)達は更にパニックを起こした。

「どうしたらいい？！　どうしたらいい？！」

パニックを起こすリーダー格の屍(ゾンビ)

「聞いた事がある。倒れた人を助ける為には両の手足を縛って元気になれ。元気になれと三回唱えれば起きるらしい」

別の屍(ゾンビ)が助言を述べる。もちろんどこにそんな力があるってか普通間違ってるって気付けよなってぐらい間違っているが……。
どこをどう間違えたら両手両足を縛る事になるのだろうか。
しかも元気になれってありえないだろう。

「よしどこからか縄を調達しよう。この人達を助けなければ！」

いやいやその人達を助けたいならお前達が何もせずにどこかにいけばいいんだよ。
縄を探そうと動きだそうとした屍達(ゾンビ)が動き出そうとした時、
「お前達どうしたか？」
騒ぎを聞きつけたのだろう底化の家から様子を見に来た男が屍達(ゾンビ)に声を掛けた。
「あの！　縄がどこにあるか知りませんが？」
「縄ならそこら辺の納屋にあると思うが……てかお前ぇ達ここの住人じゃないだろう何処から来たんだ？」
「えーとあっちからです」
屍(ゾンビ)は間抜けにジャングルの方を指差してそう呟く。
「嘘いうなや。あっちは深い深いジャングルしかないぞ。あんな所から人が来れるはずがないやろ～」
ハッハッハッと豪快に笑いながら肩をバシバシ叩きまくる。
その度に腕や頭が落ちているが眼に入っていないのか構わず叩き続けている。
そんな中やっと男は地面倒れている夫婦二人に気付いて駆け寄る。
「おい！　どうした？！」
と声を掛けながら頬を叩いて起こそうとする。
「ん……」

銃を持った男が眼を覚まし、声を掛けた男の後ろにいる屍（ゾンビ）達を指差して、

「化物〜〜〜〜〜〜〜〜！！！！！！！！！！！」

あらん限りの声と共に引き金を引いた。
声を掛けた男ごと屍（ゾンビ）を撃った。
きっと知り合いできっと友達だったたであろうその男を撃ち抜いた。
それは正しく悲劇だった。起こるはずがなかった悲劇。
もし撃った男が正気だったら。もし撃たれた男が家から出なかったら。もし屍（ゾンビ）が逃げ出さず収容所で大人しくしていたらこの悲劇は起こらなかったんだろう。
だが今更後悔しても仕方がない。屍（ゾンビ）は蜘蛛の子を散らす様に逃げ出した。
男は眼を血走らせながら屍（ゾンビ）撃ちながら追いかける。
そして悲劇は連鎖する。
騒ぎを聞き付けた住人が家から飛び出して来る。
そして逃げ惑う屍（ゾンビ）とそれを追いかけている男を見て驚くが男の錯乱に気付かずに近づいて声を掛けた。

「おい！　どうした！」
「化物！　近づくな！」

ズカンッ
錯乱している男は躊躇いなく頭に照準を合わせて引き金を引いた。
残響する銃声、ゆっくり倒れていく。屍（ゾンビ）と他の住人に降りる一瞬の静寂。そして……

パニック！！！

第三話（前書き）

これで終わりです。

第三話

逃げ惑う屍(ゾンビ)と住人男は全てを化物と認識し区別なく猟銃をぶっ放す。
それからは説明は憚れる程の地獄絵図が広がった。
そして男が正気に残った時男は見てしまった。自分以外の人々が血を流しながら息絶えた惨劇を男は作り上げてしまった。狂ったままの方がいいだろう。しかし一度正気に戻ったと言う事はそれはもう一度狂ってしまうと言う事だ。

「うわぁ～～～～～～～！！！！！！！！」

男は絶叫しながらジャングルの中へと消えて行った。しばらく声は聞こえていたがやがてその声も聞こえなくなった。奴を追って行ってもめんどいのでそのまま奴は死んだ　それで終わり。
そして戻って村。男は全ての住人は死んだと思ったが実は生きている奴がいた。
まぁ言わずもがな屍(ゾンビ)の事なんだがな。
こいつらはない頭を使って死んだフリをしてやり過ごしていたのだ。

「いなくなった？」
「ああ、ジャングルの方に行ったみたいだな……」
小声で囁き合っていた屍(ゾンビ)達だったがようやく体を起こし一言。
『怖かった～～！！！！！！！！！！』
いやいやいやお前らの方が百倍怖い！
「とりあえずこの人達を埋めてあげよう。どうやら俺達が原因らし

いからな」

みたいじゃなくて原因そのものだっつーの。

しかし屍達の不幸は続く。

屍達が村人の死体を自分の体を崩しながら埋めている時、たぶん隣村の商人か又は外に出ていた住人が帰って来たのだろう。荷車に色々と荷物を載せた馬車が村の入り口から入ってきてそして死体を埋めていた屍達を目撃してしまった。

そいつは気が弱いのかなんなのか何も言わず、叫びもせずただ手綱を捌いて反転し逃げ去っていく。

屍共は呆気に取られて動けなかったが気にせずに作業に戻った。

だが屍にとってこれは間違いだった。

数日を掛けて屍は全ての村人を埋めてあげ一息ついているその時家の中に入ってテレビを見ていた屍が飛び出て来た。

「おい！　なんか凄い事になってるぞ！」

それぞれの屍は全ての家に入りテレビを付け同じチャンネルにして食い入る様に睨みつける。

テレビの中では褐色肌に白髪、後ろにタ〇ン∀を従えた最年少の大統領が映っていた。

「先日、ジャングル内の施設内で実験動物が逃げ一つの村を壊滅させました。私はこれを重く受け止めこれ以上被害を出さないため今なお実験動物が潜伏している村に向けて核を使うことを決定しました。国民の皆さまには心配をおかけしてしまって申し訳ありません。ですがこれからも私を信じて付いて来て下さい！」

そこで画面は切り代わり、ミサイルの発射台が写し出される。そしてカウントダウン後撃ちだされるミサイル。。そこまで見た屍達は

急いで外に飛び出し、

「逃げるぞ！」

パニック寸前まで追い詰められた屍(ゾンビ)達は四方八方に逃げ出して行く。だがしかし遠くから空気を切り裂く音が聞こえてきた。飛来してきたのは巨大な円柱の形をし、先端が丸びを帯びている先程テレビで見たミサイルと同一だった。屍(ゾンビ)は唖然としたまま落下してくる物体から眼を話せない……そして屍(ゾンビ)が見守る中核は村の中心に降り立ち放射能を撒き散らせながら爆発した……。

その後屍(ゾンビ)の事を記した資料はすべて破棄され歴史から抹消された……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9057v/

ゾンビ

2011年11月16日12時50分発行